拝啓　今年も早や８月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、さるすべりの花が今が盛りと咲いております。

今回から、小西芳之助先生の『コリント人への第二の手紙講解説教』からの引用を致します。

今回の「エンカウンター」の５ページ、「いかなる困難も慰めて下さる」という項目には、次のようにあります。

「神は、いかなる患難の中にいる時でも、わたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。（コリントⅡ 1.4）

コリント後書１章４節には、「神は、いかなる患難の中にいる時でも」とあります。これは、何たる慰めの言葉か。現世において、いかなる患難をも慰むというのであります。我々が慰められず、患難にへこたれているとすれば、これは信仰が分かっていないことになる。これは、勉強しなければならないという証拠であります。患難の種類は問いません。すべての、いかなる患難をも神は慰めるという。患難を持たない人は慰める力がありません。私達が慰めて頂く目的は、すべての悩んでいる人々を慰めるため、であります。パウロは、あなた方がいかなる困難にあっても、神が慰めて下さることを確信していると書いてあります。」

この言葉には、若いころうつ病で悩んでいたころ、ずいぶん慰められたことがある。

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』8 月 19 日

「良く始めることは、半分成就したこと

私は、テレビで相撲を見るのが好きである。勝負は、最初の立ち上がり方で殆ど決まってしまうという。人生もまた、そうであると思う。今日の一日は、どうして始めるかによって決まる。今日一日をどうして始めるかを注意しようではないか。毎朝、天国に一日近づいたことを神に感謝する祈りと、主の御名を呼びつつ、今日一日の義務を尽くそうとする決心とをもって起き上がろうではないか。」

新渡戸稲造先生『一日一言』8 月 7 日

「同じ人を匹夫にするか豪傑にするか、小人にするか君子にするか、どちらにも作りあげる力は、だれしも必ず出会する落胆失望の時に起こる一決心にあるのである。最後の 15 分に来て、もう駄目だと斃るる者はそれきり。もう一つと立ち上がれば後はしめたもの。」

この言葉に励まされて、私は立ち直ったことがある。

松下幸之助先生『道をひらく』「おろそかにしない」

「仕事には知恵も大事、才能も大事。しかし、もっと大事なことは、些細と思われること、平凡と思われることも、おろそかにしない心がけである。むつかしいことは出来ても、平凡なことは出来ないというのは、本当の仕事をする姿ではない。

些細なこと、平凡なこと、それを積み重ね積み重ね来て、その上に自分の知恵と体験とを加えてゆく。それで初めて、危なげのない信頼感が得られるというものであろう。
賽の河原の小石は崩れても、仕事の小石は崩れない。」

内村鑑三先生『一日一生』8 月 7 日

「イエスの義がありて彼に臨みし栄光があったのである。人は生まれながらにして復活しうるものでは無い。義の結果として、あるいはその報賞（むくい）として復活するのである。イエスが復活したまいしは、彼が義を全うしたもうたからである。しかして我らは信仰によりてイエスの完全なる義を我が義となすを得て、イエスに望みし復活永生の栄光がまた我らにも望むのである。ああ大なるかな、神の愛。」

バークレー先生「死者は語る」6 月 9 日

「両親は死んでも今なお語っている。
亡くなった多くの教師が今なお語っている。
多くの場合、友達は死んでもなお語っている。
多くの伝道者は死んだ後もなお語る。
人間はすべて自分の一部を残してこの世を去ってゆくものである。人は死んでもなお語り続ける。ねがわくは、我らがこの世を去る時に、イエス・キリストのために語りつづけるなにか良きものを、残していくことができますように。」

カウマン先生『日の出に向かって』7 月 8 日

「パウロは 70 歳で自らに与えられた目標に進み、堂々と彼の最後の書簡において「私は戦いを立派に戦い抜き、走るべき行程を走りつくし、信仰を守り通した」と、つけ加えました。これらの人々の人格と業にならうことによって、すべてのことが私の中に蓄えられ、私の努力をふるいたたせ、豊かなものにしてくれます。それは過去だけのことだったでしょうか。パトモス島の聖ヨハネが時間の制限を超えて聖なる都市、即ち新しい国と命とを見たように、私に未来の夢を見させてください。

若さを保つ唯一の方法は、恵みの中で老いることである。年令には、それぞれ何かの美しさがある。あなたは自分が年老いていくという事実と争わないで、それを有効に用いよ。」

本誌読者の佐藤文男さんと小西忠雄さんと一緒に行なっている、小西先生のパウロ書簡講解説教集の最後『テモテ前・後書、テトス書、ピレモン書』の編集作業がほぼ出来上がり、出版社に原稿を渡すばかりとなりました。小西先生は、ロマ書からピレモン書まで、すべてのパウロ書簡を 10 年以上かけて講解説教されましたが、それら全部が本の形で残ることになります。

新型コロナが急拡大していますが、マスク、手洗い、うがいなどはこれまで同様実行されて、十分ご注意下さるようお祈り申し上げます。

8 月 23 日　　山口周三

エンカウンターの読者各位